

日本英学史学会中国・四国支部

ニューズレター

No. 102

Historical Society of English Studies in Japan, Chugoku-Shikoku Chapter

<エッセイ>

獺 祭

一年頭のご挨拶—

竹 中 龍 範

初春のお慶びを申し上げますとともに、本年が皆さまにとりまして幸多き1年となりますようお祈り申し上げます。コロナ禍のほうは、新種の変異株が発生するなど、なおも予断を許さない状況が続いておりますが、それでも、本年度第2回研究例会（2021.12.11）は対面型とオンラインとの併用によるハイフレックス形式にて開催することができ、少しは光明がさし始めたかと喜んでいるところです。皆さまには引き続きわが支部の発展にご協力・ご支援をお願い申し上げる次第です。別けても年度明けに発行予定となっている『英学史論叢』は第25号という節目を迎えます。記念号と位置づけるべく、「研究論考」はもちろんのこと、「英学史随想」や「英学史時評」にも奮ってご投稿いただきたく願っております。

本エッセイは「獺祭」と題しましたが、日本酒の利き酒会をしようとするものではありません。獺祭は獺祭魚とも言い、「カワウソが自分のとった魚を並べること。人が物を供えて先祖を祭るのに似ているところからいう」（『大辞泉 2』）と定義されるところですが、ここではその第2義「《晩唐の詩人李商隠が、文章を作るのに多数の書物を座の周囲に置いて参照し、自ら「獺祭魚」と号したところから》詩文を作るとき、多くの参考書を周囲に広げておくこと」（同）に因んで選んだものです。

昨年秋10月半ば、自宅のパソコンが突然動かなくなり、自動修復される様子もないため、やむなく、翌朝、なじみの電器店に持ち込みました。数日後に電話があつて、メーカー送りの修理となるが、本体中のデータ、ファイルが失われる可能性があるので了解してもらいたいとのこと、仕方なく、任せることといたしました。修理が終わって当方に戻ってきたのはちょうど1ヶ月後、恐れていたとおり、データ、ファイルはすっかり消滅しており、バックアップをとっていなかった情報は全て失われていました。

この1ヶ月の間には、県内中・高英語教員の研修会にコーディネータを頼まれ、また、高校生の英語スピーチコンテストに審査員長を任されて評価のまとめ、講評を行うこととなっておりましたので、その関係の連絡や資料作成にパソコンが使えず、久しぶりに手書きの文書作成となり、郵便、ファックスでのやり取りとなりました。その際に机の上や脇に辞書、参考図書などを広げ並べて仕事をしておりましたので、この李商隠にかかる「獺祭」の話を思い出したようなことです。

ちなみに、正岡子規がその住まいを獺祭書屋と名付け、自ら獺祭書屋主人と号したことからその忌日9月19日が「獺祭忌」と呼ばれることは広く知られるところですが、この日付を覚えるために mnemonic としてこのような愚歌一首をひねってみました。新年の百人一首代わりにお笑い飛ばしてください。

句を一句 詠みしは子規の獺祭忌 また系瓜忌と称ふ人あり

（日本英学史学会中国・四国支部長）

令和3年度 第2回（通算 84 回）研究例会報告



2021 年 12 月 11 日（土）、令和 3 年度第 2 回（通算 84 回）研究例会をハイフレックス形式（対面での実施内容をオンラインでも同時配信するハイブリッド形式）で開催しました（14:00～17:00）。対面参加者は 16 名でした。ご参加くださった皆様に御礼申し上げます。

日 時： 2021 年 12 月 11 日（土） 14:00～17:00
方 法： 対面、およびオンライン会議システム Zoom によるハイフレックス開催
対面実施会場： 安田女子大学 1 号館 1505 教室（広島市安佐南区安東 6-13-1）

研究発表(1)（14:05～15:15）

「昭和 10 年代の旧制中学における英語教育

—福岡県立中学修猷館の自作教材に焦点を当てて—

安部 規子（久留米工業高等専門学校）

【発表を終えて】今回令和 3 年度第 2 回（通算 84 回）研究例会において、福岡県立中学修猷館において昭和戦前・戦時期に自作された英語教材についての調査結果を発表する機会をいただきありがとうございました。発表では、「多様な大人の内容世界に生徒をなじませる」という目的をもって編集された教材である安住正夫編『内容を主とした入試問題選集』に焦点をあて、その内容について「抽象性・日常性」の面とリーダビリティ指標による難易度分析の結果や当時教材を使用した生徒の回想などを中心に報告しました。

修猷資料館でも所蔵品のデジタル化が進められ、資料館運営委員の卒業生がこの問題集の全ページを撮影して大変見やすい画像にしてくれたことでその内容を深く研究することができました。また、同窓会館に備えられた戦前の卒業学年の記念誌の閲覧や、昭和 17 年卒で 96 歳の伊藤康彦氏にインタビューできたことで当時この問題集を使った生徒がどのように感じていたかを知ることができました。戦前の卒業生は当然非常に少なく、この幸運な出会いによって知り得た言葉を本学会の先生方に報告することができてよかったと思っております。

発表後には出席された先生方からご意見をいただけ大変参考になりました。また、資料館も所蔵しておらず現物を見るのが難しかった、同じく安住の手による『基本要項の分類による英文解釈問題選』を江利川春雄先生が所蔵されていて、この貴重な問題集を今後私が活用するようにとお譲り下さいました。本当にありがとうございました。

今後の研究課題として、同じような沿革を持つ学校での自作教材の調査が必要だと考えていますが、実際に戦前の自作教材を所蔵している学校に心当たりがなく、どのように進めていったらよいか思案しているところです。

最後に、対面とオンラインの両方で行われた今回の例会の会場をお世話くださった松岡博信先生といつもスムーズな運営をしてくださる馬本勉先生に深く感謝申し上げます。

【参加者の感想】

◆昭和戦前・戦時期の修猷館をめぐる状況をお聞きして、同館における英語の位置づけがどのようなであったかが窺われ、興味を覚えました。特に修猷館における在職期間の長い英語教員がいて生徒用の参考書を自ら著していたことをめぐっては、その内容分析とあわせ、例えば広島中学などの例に見られるように、現職の旧制中等教員による著作が全国的にはどれくらいあり、その内容がいかなるものであったのかなどの観点から比較されると修猷館の特徴が浮き彫りにされるのではないのでしょうか。それにしても、修猷館の資料館に収蔵される資料の内容がどのようなものであるか、参観の機会が得られればと願っております。＜Dragon＞

◆昭和10年代の旧制中学における英語教育についてのお話を聴いて、日本文化の中に取り込んだ「英語」の教育が脈々とつづいて行われていたことをあらためて実感することができました。とくに旧制中学の3年生までが子ども向けの内容であったのに対して4年生向けの教材や入試問題が一気に内面的思考力を要求するものになっていたということ、‘intellectual interests are higher than material ones’というこの傾向が戦後もつづいたのだなあ、日本文化が英語を呑み込んで、governing Englishしながら、つづいてきたのだなあ、とあらためて感慨深く傾聴しました。ありがとうございました。

＜Qats＞

◆今回のご発表では、修猷館で使用された自作教材、特に安住正夫の『内容を主とした入試問題選集』を取り上げられましたが、この問題選集が当時としては画期的と思われる「内容世界」という視点から、膨大な入試問題から適切な文章を抽出してまとめたものであると知りました。このような先見性と熱意に満ちた人物に興味を抱きました。ちょっと調べてみると、木村健康氏が「修猷館の教育の精神的基礎原理は何かという問いは、答えるには困難である。・・・安住正夫先生のように、「英語の鬼」といってもよい先生が長い間教鞭をとられて、英語教育に尽牽されたのである」（『東大 嵐の中の四十年』春秋社、1970年）と述べているのを知り、「英語の鬼」と畏敬されていた安住正夫についてもっと知りたくなりました。＜E. Woodhouse＞

◆修猷館の専門家と言えば安部先生、定着しましたね。戦前の旧制中学、商業学校が独自で参考書を作成している例は稀ですが、読んだことがあります。それは地域を代表する学校である証とともに、その先生方の優秀さの証でもあります。もう旧制の中学修猷館の研究は終わりということでしょうか。今度は同じ福岡県内の旧制中学も研究対象として頂ければ同じ教育史を調査している私としては嬉しく思います。戦前の英語教育の実態については、思った以上に旧制中学では熱心にやっています。今、出典は思い出せませんが、リベラルな校長に当局が狙いをつけ、校長は息子を軍関係の学校に進学させ、その息子は戦死したという話を思い出しました。残された生徒達は「校長先生が自分たちの命を守ってくれた」と回想していました。自由にものが言えない国に戻してはいけませんね。オーラルヒストリー、貴重で面白いですね。今回も刺激的なお話をありがとうございました。＜YH＞

◆修猷館は知人の出身高校の前身ということもあり、今回のご発表を楽しみに拝聴しました。名門校英語教員による手作り教材が刊行されていたことは驚きでした。その内容を伺い、現代の参考書にも通ずる原点に接した思いがしました。『内容を主とした入試問題選集』については多様な話材から成っていますが、「設問」までは掲載されていないとのことでした。設問が加わると野暮なのかも知れませんね。執筆者の安住正夫先生に教わった生徒の回想話は貴重です。安部先生が直接「聞き取り」されたという思いが下がる思いがしました。＜堂鼻康晴＞

◆修猷館の自主教材4冊を中心に一次資料に基づいた手堅いご研究で、同中学校の定点観測に基づく中等英語教育史研究に新たな光を当てられた学びの多いご発表でした。うち2冊は一般書として市販されたようですが、手もとの白井・安住共著『基本要項の分類による英文解釈問題選』（三省堂、昭和14年3月15日発行）は「昭和15年7月7日 第13版」とありますので、内容の秀逸さと全国的な影響度の大きさがわかります。現職教員による自前の（受験）参考書といえば、戦後は森一郎（日比谷高校）の『試験にでる英単語』（1967）が思い浮かびますが、中等教員の力量と、それを保障する時間的余裕（都立高校には長らく週1日の研修日がありました）の大事さを改めて感じました。

＜みかん舟＞

◆『内容を主とした入試問題選集』に関するお話を興味深くうかがいました。この問題集、「復刻」の可能性があればと思いました。内容世界になじみを持たせ、「予習をして言葉はわかった気がするが、筋がわからない」という生徒の助けとしようとする編纂意図は、今も重要な点であると感じます。難易度の判断を自身の「勘」によったという安住正夫先生の英語遍歴にも大変興味が湧きます。今回も安部先生の研究手法から多くを学びました。ありがとうございました。＜Horse＞

研究発表(2) (15:30～16:40)

「英語教育早期化のアジェンダ設定におけるアクター群の言説 ——臨教審第二次答申までの流れ——」

平本 哲嗣（安田女子大学）

【発表を終えて】早期英語教育の流れを作った現代的な起源としては1986年の臨時教育審議会第二次答申が知られています。本発表では、多様なアクター群の言説を踏まえつつ、臨教審における英語教育早期化提言に至るまでの歴史的経緯を、Kingdonの提唱する「政策の窓」モデルに基づき考察しました。現在、小学校の英語教育に対して批判的な言説もありますが、過去の経緯を踏まえつつ「もし初等教育に外国語教育を導入しなかったら何が起きるか」と想像してみるのも意義のあることだと思います。過去と現在の連続性を意識して、単なる批判から一步踏み出し「なぜこういう流れが生まれたのか」を問える研究を続けたいと考えています。

【参加者の感想】

◆戦後の早期（小学校）英語教育導入に至る動きが第一次高度成長期あたりから見られるとのことで、すでに半世紀以前のこととなっていることとお聞きし、昭和50年前後の学生時代に松村先生が新学制発足前後のことがすでに分らなくなっている、当時の証拠資料を今のうちに調べ、集めておかねばと強調されていたことを思い出しました。例えば、指導要領が試案であった時代に各県にて作成された指導書などもその全貌どころか、片影すらも捉え難くなっております。引き続いて資料発掘に努めていただき、特に当事者への取材などは、松村先生がよくおっしゃっていた「当事者のご存命のうちに」ということを心掛けていただければと思います。＜Dragon＞

◆英語教育早期化という政策の窓（Policy Window）が開くまでについてのお話を聴いて、「英語」という言葉が日本文化に与えた滋養分としての役割をあらためて実感いたしました。「英語」の問題が教育界のみならず産業界、政界、メディア等々ヘテマ（滋養）を供給し、やがて政策の流れが生まれ、ついに政治の流れ（Government Agenda）に至る。倉田百三が外国語について「材料と養分とを供給する補助的なものであるのは云う迄もない」と述べていることばを思い出しました。まさしく日本文化が「外国語」を呑み込んで蠢いていることを実感いたしました。お話ありがとうございました。

＜Qats＞

◆博士学位論文を基にされたとのことで、大変内容の濃いご発表でした。また、その精緻で手堅い研究手法に感服いたしました。フロアーからの質問にありましたように、アクター群の分類・分析にはま

だ考察の余地があるようですので、今後のご研究の進展とそれを受けてのご発表を楽しみにしております。＜E. Woodhouse＞

◆小学校英語の教科化に向けて緻密で冷静な分析に感動致しました。田邊先生のご意見で思い出したのは、金谷憲先生がお書きになった『英語教育熱』にある「実践的コミュニケーション」という言葉をめぐる回想です。いずれ、小学校英語は1年生から始めることになるでしょう。その時代から見ると、先生のご研究は、貴重な財産になると思います。田邊先生の助言を踏まえてもっと厚みのあるバランスに取れた研究になることを期待します。そうなれば、日本の早期英語教育の確立を実証的に明らかにした代表的な研究となる予感がします。私の専門とは異なりますが、とても面白く拝見させて頂きました。ありがとうございました。＜YH＞

◆「財界主導の英語教育政策（早期英語教育）」だと何気なく感じておりましたが、このたびの研究で行政、教師・研究者、学術組織、教育機関、産業界、立法、メディア、一般市民など多角的に影響しあい、政策が形成・実行されていることが理解できました。政策とメディア広告の変遷など大変興味深かったです。平本先生が最近の関心事の一つであると言われる、『『商品』としての早期英語教育が世論形成に与えた影響』についての今後の研究が楽しみです。＜堂鼻康晴＞

◆博士論文に基づく斬新な方法論と一次資料の博搜による深みのあるご発表で、質の高さに圧倒されました。「政策の窓」モデル等による小学校英語導入経緯の分析において、主要なアクターの中に授業担当者であり最大の利害関係者である小学校教員が欠落していたことがわかり、ここでも当事者不在の政策決定が現在の惨劇を招いているのだと思いました。今回は中教審二次答申（1986）までが対象でしたが、中教審から小学校外国語教科化までの過程については、同じく「政策の窓」モデルを駆使した青田庄真氏の博士論文『日本の英語教育政策をめぐる政治力学—中央および地方における多元的政策過程の実証研究—』（2021、東大）がありますので、一本の線で繋がったようです。英語教育史研究、特に政策史研究における新たな方法論にも大いに注目したいと思います。＜みかん舟＞

◆英語教育政策の決定に至る「アクター」の動きについて、膨大な資料をもとに明解にまとめられたご発表に感銘を覚えました。具体例も豊富に提供くださり、論点がよくわかりました。平本先生が最近の関心の一つとしてお話しされた「英語教育関連の詳細な年表の共有資産化」は非常に重要だと思います。私たちの支部の研究の蓄積がその一助となるよう、アーカイブを充実させたいと強く思いました。＜Horse＞

【例会全般に関する感想】

◆今回の例会はハイフレックス型ということで、その形式自体にも好奇心をそそられました。対面形式へのリアル参加を選択しましたが、同時に欲張りにも同期オンラインも聞くだけ参加をしました。オンライン参加者一人ひとりとまるでリアルに参加を共有でき、華やかな例会となりました。お世話くださった事務局の先生方、お世話になりました。ありがとうございました。＜Qats＞

◆新たな時代に向けて、ハイフレックスは今後も併用となるかも知れませんね。私の支部の大会も近日中に開きます。大変、参考になりました。ありがとうございました。事務局、特に馬本先生、松岡先生、お疲れ様でした。＜YH＞

◆コロナ禍によるリモート会議やハイブリッド会議は今後の主流になることを確信しました。ハイブリッドだからこそ東京など遠距離からの参加も可能になり、普段会えない方も交えた収穫の多い研究会になったように思いました。＜堂鼻康晴＞

◆会場のお世話をしてくださった松岡先生に篤く御礼申し上げます。本支部初のハイフレックス形式による研究例会を実施する上で理想的な会場でした。対面とオンラインを併用する場合、会場内の音声をどうコントロールするか（ハウリング対策）が課題となります。どのような機器をどう使いこなせばよいか、今後の運営に際してのヒントを多く得ることができました。本当は、コロナが収束して一同に会することができれば一番良いのですが。＜Horse＞

『英學史論叢』第25号原稿募集

日本英学史学会中国・四国支部研究紀要『英學史論叢』第25号(2022年5月発行予定)の投稿論文を募集します。研究論考、研究ノート、英学史随想、英学史時評、書評等、会員の皆様の積極的なご投稿をお待ちしております。

原稿提出締切 2022年2月20日(消印有効)

- ・投稿に際しては、Newsletter前号、『英學史論叢』第24号に掲載の「執筆要領」および「標準書式」に従ってください。
- ・標準書式にそったテンプレートファイルをご希望の方は、事務局までお知らせください。

◆第25号の記念号となりますので、研究論考、英学史随想へのご投稿をぜひよろしくお願いいたします。

中国・四国支部からのお知らせ

◇2022年度の研究例会(日程は予定)発表者募集

来年度の研究例会における発表者を募集します。詳しくは『英學史論叢』およびウェブサイトに掲載の研究例会規程を参照してください。対面実施が可能な場合、第1回は広島市、もしくはその近辺、第2回はそれ以外の中国・四国地方の適宜の場所にて実施を検討しています。

第1回	2022年 5月28日(第4土曜日)	申込期間	2022年2月28日～3月28日
第2回	2022年12月10日(第2土曜日)	申込期間	2022年9月10日～10月10日

◇年会費の納入について御礼とお願い

今年度会費(一般3,000円、学生2,000円)を納入いただきありがとうございます。これからご納入の方は、次の通りお手続きくださいますよう、どうぞよろしくお願いいたします。
(振込手数料は各自でご負担くださいますようお願いいたします。)

ゆうちょ銀行「振替払込用紙」を用いる場合
(口座番号) 01360-9-43877
(加入者名称) 日本英学史学会中国・四国支部
ゆうちょ銀行へ他の金融機関から振込む場合
(店名) 一三九(イチサンキュウ)店(139)
(口座番号) 当座 0043877
(加入者名称) 日本英学史学会中国・四国支部

日本英学史学会中国・四国支部ニューズレター No.102 2022年1月31日発行

発行 日本英学史学会中国・四国支部(代表 竹中 龍範)
事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町5562 県立広島大学 馬本研究室内
電話: 0824-74-1725(研究室直通)
e-mail: eigaku@tom.edisc.jp
ホームページ <http://tom.edisc.jp/eigaku/>
郵便振替口座 01360-9-43877 日本英学史学会中国・四国支部